

2022年 宗会（常会）宗務総長演説（要旨）

2022年5月26日

ご参会、誠に有難うございます。

宗会（常会）の開会にあたり所信を申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

【世界の情勢】

はじめに、大きな悲痛の中で申さねばなりません。本年2月からのロシアによるウクライナ侵攻が、現在も続いております。本当に、悲しく痛ましく、あつてはならないことであります。しかし厳然とした事実であり、皆さまと同様、私も言いようのない気持ちを抱えております。

先日、ある報道を視ておりましたところ、ウクライナの医師が、戦禍に巻き込まれた幼い子どもに、泣きながら心臓マッサージをしている姿が映し出されていました。命を救えずに涙する医師は、カメラに向かって「この現状が見えるか」「もう殺さないでくれ」というメッセージを投げかけておられました。その痛ましい声と情景に、私は沈痛な思いを抱かずにはおれませんでした。

また近くは、アメリカ・テキサス州の小学校において銃乱射事件が起き、多くの方が亡くなりました。その惨状を想い、重ねて、言葉を失うような感覚がございます。

同時に、真宗の教えをいただく身として、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と、わが身の危うさに、業縁存在である人間の事実というものに、大きな警鐘を鳴らされているものと受けとめております。

宗門は、1998（平成10）年の蓮如上人五百回御遠忌に向けて、「バラバラでいっしょー差異を認める世界の発見ー」というテーマを発信しました。世界各地の戦禍を目の当たりにする今、あらためてこのテーマに込められた「如来からの呼び覚まし」、その重さを感じずにはおれません。

今なお、恐怖と悲しみの中におられる人々に、一刻も早く平和が取り戻されるよう、即時の停戦を望むものであります。

【基本の確認】

さて、こうした厳しい現実、人間の事実と向き合う中、明年は、待望の「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」の厳修年度であります。

また特に、2022年という年は、同朋会運動が発足してからちょうど60年、「真宗同朋会条例」成立60年という節目であります。僅か8条ほどの小さな条例により始まった「同朋会運動」。私はここに、宗門の生命がある、「大谷派なる

宗門」の存立の本義が示されてあるものと確信する一人であります。

この時節にあたり、本日はあえて「この場」にて、宗門の最高議決機関の皆さま方と共に、今一度「同朋会運動の基本」を確かめたい。そう強く思いまして、ここに登壇いたしました。

同朋会運動の確かめ。これは宗門の生命線、その確認に他ならないのでありまして、運動の確かめが必然的に「慶讃法要」厳修の意義の確かめとなり、また同時に、「これからの宗門」の方向性、すなわち「宗務改革」の必要性が、おのずと知らしめられる最重要事項であります。

したがって、混迷を続ける現代に、私どもとして「本願の宗教」の面目を発揮する、その上で外すことのできない一点でありますから、今どうしても、私自身として、皆さまと共有しておきたい要旨を申し上げます。どうぞ宜しくお願いいたします。

【同朋会運動の濫觴】

ご承知のとおり、宗祖聖人は、法然上人御命終後の吉水教団の系譜、『法水分流記』を拝見しますと、東山大谷の門徒の中に身を置かれたと記録されております。「愚禿釋親鸞」という名のりに表わされますように、念仏の教えを忘れる存在であるものが、一人の門徒として、隣の人が称える念仏を聞き、ご自身も念仏申す身となられた。その情景を想う時、ここに私は同朋会運動の濫觴、「はじまりの一滴」というものが、おのずと感じられてくるのであります。

それを近年、特に実感いたしましたのは、2016（平成28）年3月の「御本尊還座式」であります。あの日、満堂の参詣者による「恩徳讃」の響きたるや、仏法に出遇えた喜びと感動そのものであります。そこでは皆が、涙しておられた。それは同朋が唱和する恩徳讃、満堂にこだまする念仏の声を聞き、涙されていたのでありましょう。

隣の人が称える念仏の声に促され、全くはからずも、この自分が念仏申す身となり得た。まさしく「他力と言うは、如来の本願力なり」と、『教行信証』『行巻』の教言が、確証をもって響いてきた御仏事でございました。

こうした尊い場を与えてくださった宗門、その生命線である同朋会運動について、私は常に想起す言葉がございます。

それは、昨年お浄土に還帰されました、寺川俊昭先生の著書『念仏の僧伽を求めて』の一節にある言葉であります。

曰く、「同朋会運動は、一面には教団のまじめな自己反省、もっと強くいえば自己批判、そういうものをもっております。自分自身の、そして教団の信仰のゆがみ、誤りといったものを悲しみのなかに批判し、批判を通して親鸞聖人の正しい信仰に帰ろうという祈りをもってします。そして『歎異抄』が強く浮き彫りにしている同朋教団を回復しようとする志向が、強く動いているでしょう」と。

また、「本願の教えこそが、人間にとって真理である。本願の教えがなかったならば、われわれはこの荒廃した現代の社会に、どこにも救いを見出すことはできない。本願の教えによってのみ、豊かな人間性は確立されるのだということを、真宗はあらゆる力を尽くして現代の社会の中で明らかにし、語って行かなければならない」と。

先生はこうした表現をもって、人間を荒廃させ、対立させ続けていく時代において、教団がになう使命と存在意義をご教示くださいました。

約半世紀前の言葉であります、今なお、自身を、教団を歩ませる灯火であり、その歩みを止めたならば、教団は生命を失う。そう教えられた一人であります。

【「真宗再興」の伝統】

さて、教団史の上で申しますと、同朋会運動は60年の歳月を経たわけでありますが、その基本となる趣旨は当初から一貫してございます。

それはご承知の、「宗祖七百回御遠忌」直前の1956（昭和31）年に発表されました宮谷宗務総長による「宗門各位に告ぐ」、いわゆる「宗門白書」に、簡明にして直截に表現されております。

曰く、「大谷派に一万の寺院、百万の門信徒があるといいながら、しかも真の仏法者を見つけ出すことに困難を覚える宗門になってきているのである。極言するならば、われわれ宗門人は、七百年間、宗祖聖人の遺徳の上に安逸をむさぼって来たのである。いまや御遠忌を迎えんとしてわれら宗門人は、全身を挙げて深い懺悔をもたねばならない。単に御遠忌のにぎにぎしさを夢みることによって、この現状を糊塗するようなことがあるならば、宗門は疑いもなく、歴史から冷やかに嘲笑を浴びるであろう。宗門は今や厳粛な懺悔に基づく自己批判から再出発すべき関頭にきている。懺悔の基礎となるものは仏道を求めてやまぬ菩提心である。混迷に沈む宗門現下の実情を打破し、生々澆漓たる真宗教団の形成を可能にするものは、この懺悔と求道の実践よりほかはない」と。

「懺悔と求道の実践」。66年前の文章であります、読み返すたびに深い感銘を受け、宗門の要点というものを教えられる一文であります。

では、その趣旨に基づく同朋会運動とは何であるか。それを今、自身の受けとめとして一言で申しますならば、同朋会運動とは「真宗再興」の伝統に応える運動であり、「真宗再興」を期す信仰運動であります。

蓮如上人を「御再興の上人」と敬い申し上げてきた、あの「真宗再興」。すなわち、大乘仏教の生命を回復する、その覚悟。この一点において必然性をもって興起したものが同朋会運動であり、その志願を承け継ぐ者、になう主体者が、私ども一人ひとりであります。

そうして、宗門はこの同朋会運動の歩みを通じ、「教団問題」「部落差別問題」「靖国問題」をはじめとする重大な課題をたまわることができました。

大乘至極の仏道を歩まんとする運動の、大いなる見落とし、つまり「全てのもを御同朋とする」まさしく大乘の精神、その精神からの問いかけをいただいたのであります。

またこれは、共に仏道を歩まんとする一人として、現実の問題・実生活の課題への応答を、決して自分の経験や知識のみを頼りに考えるのではなく、また「自分が正しい」というところに固執することなく、常に常に祖師聖人の声に、すなわち御聖教に尋ねる、自ら聴き続けるという、そうした真宗門徒の基本姿勢を促してくださる大切な問いかけでもあります。

【宗憲前文の提起】

こうした同朋会運動の歩みがあって、宗門は今から41年前の「この場」において、「宗憲改正」という一大事を果たしたのであります。1981（昭和56）年6月11日のこと、本日ご参会のこの議場においてであります。ここにあらためて、文字通り命がけで教団を尽くされた先人の皆さまに、衷心より敬意と感謝とを表する次第であります。

さて、その「宗憲改正」において、自今以後は恣意的解釈を生まぬようにと新たに設けられた「前文」がありますが、そこに特徴的な一節がございます。各位よくご存知のことですけれども、ここで読ませていただきます。

「爾来、宗門は長い歴史を通して幾多の変遷を重ねるうちには、その本義が見失われる危機を経てきたが、わが宗門の至純なる伝統は、教法の象徴たる宗祖聖人の真影を帰依処として教法を聞信し、教法に生きる同朋の力によって保持されてきたのである。」この一節であります。

私は、現在の厳しい宗門状況を観る時、この宗門存立の「本義が見失われる危機」という一語について、特に注意を促されるのであります。

恥ずかしながら、正直に申しまして私は、宗憲改正当時にこれを読みました時、ここでいう「本義が見失われる危機」とは、同朋会運動に反対している人たちのことであると。例えば宗派離脱をした方々、あるいは、宗門の財産を私物化しようとする、いわゆる「第三者」の介入による混乱のことを指して書かれているものとばかり思っておりました。「御同朋」の教団であり、「同朋」会運動であるにもかかわらず、であります。

今になってみれば、それはあまりに身勝手に狭く、恥ずかしい認識でございますが、私は今日、この点を互いに、もう一度確かめ直す必要があるように思うのであります。

私どもは、現に「真宗大谷派」という教団のご縁によって、お念仏の御教えを身近にいただくことができております。そして、共に子育てにあずかってきた同朋会運動は、教団の総合体を「ひとつの会」として、すなわち「真宗同朋会」と観ていく、受けとめ続ける信仰運動であります。

通常、信仰は個々別々のものでありますから、教団組織が旗を振って進めることではありません。では、何故に訓覇宗務総長は、60年前の「あの時」、同朋会運動を提唱されたのか。この「問い」と、ただいま取り上げました前文の一節、その受けとめの問題は、私は通じていると思います。

それを今、端的に申しますならば、建前や体裁を整えても、それでは済まない課題を抱えている寺院集合体である教団。その教団の実情から逃げずに、如来から痛まれ、願われている存在であると感じつつ、「常に正しい自分」ではなく「無限に教えられる必要がある自分」というものを、南無阿弥陀仏により回復する。この重大事を忘れないために、また、先ゆかれた大切な人たちに覚悟を示す意味で、訓覇総長たちは、一旦は信仰結社である「真人社」にて教団組織の外に出たにもかかわらず、もう一度教団の中に入って、火中の栗を拾うがごとく、身を削るような思いで同朋会運動を始めてくださいました。

その流れをくむ私たちが、もしも、この前文の「本義が見失われる危機」を他人ごとと受けとめ、分かっている人たちのこと、自分の意に沿わない人のことといった、傲慢な認識があるとすれば、私は、それこそが「本義が見失われる危機」ではないかと思うのであります。

むろん、前文に記されている「本義が見失われる危機」は、文脈上は過去のことを述べています。しかし、今ここにおいて、宗憲改正の趣旨、同朋会運動60年を受け止めようとする私たちにとりましては、「本義が見失われる危機」とは、常に「現在のこと」であり、決して他人ごとではありません。

この問題は実は、人間の思慮分別ではどうにもならない「懈怠界」の問題です。つまり、「何もかもに自分が正解を握っている」「分かったことにしている」、そういう、仏道における大変に見え難い重大問題なのであります。すなわち、聞法を通して、法を聞くことにおいて知らしめられる以外に、知りようのない「問い直し」、「問い返し」であります。

【宗門の使命「真宗再興」】

その意味で、このたびの慶讃法要は、宗門存立の本義を回復する機会として、私どもの世代に託された最後のチャンスと申せます。そのためには、「宗祖に還れ」という呼びかけを、あえてもう一つ超えなければなりません。宗祖の声に導かれ、「釈尊以前に還る」。つまりは、釈尊が出遇われた本願に、われひと共に帰す。それが「本願の宗教」の回復であり、「真宗再興」の精神を今日に受けとめる根本でありましょう。

おもえば、宗祖聖人は、「真宗再興」の道しるべを「如来所以興出世 唯説弥陀本願海（如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり）」と表現されています。また蓮如上人は、「真宗再興」の志願を「念仏もうさるべし」の一語に尽くしてくださいました。そして清沢満之先生は、「真宗再興」の

覚悟に立ち「仏教者なんぞ自重せざるや—仏教者は同時に（世間と出世間の）二種の世界に住する者たるを要す」と、自らが「本務」を見失っていることを嘆き、仏智によって自己と他者の深い繋がりを願求しようとされました。また、宮谷総長は「白書」にて、「真宗第二の再興を志願する—この指標の下に全身全霊を打ちこんで教団真個の力を培養して行きたい」と表明されています。

このように、同朋会運動の基本、本体は、間違いなく、この「真宗再興」の学仏道がかたどられたものであります。そして、「人間が人間であることを取り戻す」、それが「真宗再興」の中身であり、これこそが、今日「大谷派なる宗門」に身を置く私どもの使命でありましょう。

【『教行信証』坂東本伝承の心】

この、生涯を尽くすことのできる使命を、私どもに与えてくださった尊い方が、ご開山、宗祖親鸞聖人であります。

その宗祖畢生の書である『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』、唯一の御真筆である「坂東本」は、他ならぬ、わが「真宗大谷派」所蔵として現代に伝承されています。この稀有なる事実の「重み」というものを今、共に確かめずして、「御誕生・立教開宗」の意義がどうして全うできるでしょうか。

『教行信証』は、宗祖聖人がその一生を捧げて表現された著作であることは論を俟ちません。しかしその伝承は、宗祖お一人のお仕事ではございません。そこに必ず、無量無数の御同朋の存在を感じなければならない。私たちの直接の先輩たち、無数の尊い先達の信力や思いやりによって、現に「南無阿弥陀仏」が伝わり、「帰命無量」の声が、この私に確かに届けられているのであります。

「正信偈」の響き、「坂東本」の筆致、念仏伝来の祖聖の金言。これらに触れることができた「稀有なるよろこび」を、私はこのたびの慶讃法要において、皆さまと共に表現してまいりたい。そして、これからの宗門の相というものを、と一緒に形作ってまいりたいのです。その唯一の指標として、ここに、「真宗再興」の一句を拝受いたし、念仏の奥義を、全身を挙げて聴き尋ねてまいりたく思っております。

以上が、慶讃法要厳修年度、同朋会運動60年に際しましての、所信の一端であります。

【2022年度の宗務について】

宗務もまた、「真宗再興」を期す同朋会運動における営為であります。

その宗務について、次年度の要点を申しますので、どうぞ意のあるところをお汲み取りいただきたく思います。（詳細は財務長演説や教化研修計画等をご参照くださればと思います）

2022年度の宗務執行の重点としては、主として、

- ①「慶讃法要」の厳修に万全を期す。
- ②「是旃陀羅」の課題に取り組む。
- ③「宗務改革」を推進する。

これら3点であります。

まず、「慶讃法要」は、テーマ「南無阿弥陀仏一人と生まれたことの意味をたずねていこう」のもと、溢れるお念仏の中、相共に「慶喜奉讃の御仏事」を迎えられますよう、ご用意してまいります。

ご法要は、人間の根本、出発点に立ち帰る機会であります。この機会に、私も、これまでの教化施策の願いとするところを大切に受け取り直し、さらに深化させる取り組みを志向しなければなりません。また特に、長い「コロナ下」にあって縮小を余儀なくされております通夜葬儀、ご法事。そして、寺院・組・教区・別院・真宗本廟等における教化研修事業について、従来の「当たり前」が通用しなくなった今、慶讃法要厳修があらためての「仏事の回復」、「集まる教化」回復の契機となるよう、その始まりとして、このたびのご法要をお迎えしたく存じます。

次に、「是旃陀羅」の課題は、「対論」ではなく「対話」を基礎とし、相念ずることのできる丁寧な取り組みを継続いたします。

この課題は、親鸞聖人を宗祖といただく私どもに、「同朋」の内実が問いかけられている、すなわち「如来よりたまわいたる信心」の実際問題に他なりません。私自身、部落解放同盟の故・小森龍邦先生と幾度もお会いしてまいりました。その中で先生からは、経典からの削除を求めているのではなく、「その言葉」の読まれる側の痛みを知ってほしいと。この問いかけを一貫して頂戴いたしました。小森先生は亡くなりましたが、当然、解放同盟との懇談の場は継続しております。それは、共に悩むこと、答えよりも言葉にならない思いを共有することが大切であるからです。

よって、この課題は、同朋会運動推進において欠かすことのできない「問い」と受けとめ、関連諸課題を整理いたしまして、丁寧に取り組む所存であります。

次に、「宗務改革」の推進につきまして申し上げます。まず、「教区及び組の改編」、「門徒戸数調査」に関しまして、長年に亘る関係各位のご努力により、着実に進捗しております。特に本年は、今宗会を経まして、「東北教区」が誕生いたす運びであります。重ねて、関係各位のご尽力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

その上で、「行財政改革」の推進につきましては、昨年配布の『内局案』に対する様々な「声」を受けとめ、このたび提案いたす条例による委員会、及び宗務審議会等の「手だて」を尽くしまして、宗務改革の推進が「一人ひとりにとっての」同朋会運動の充実となるよう進める所存です。

以上、慶讃法要をお迎えする主意、同朋会運動の受けとめと合わせ、次年度の宗務について申しました。

おもえば、来年は「真宗宗歌百周年」でもあります。私たちに馴染み深いあの歌は、今から百年前、「立教開宗七百年紀念法要」に際して一般公募で出来上がったものです。あらためてその歌詞を拝見しますと、一番では「南無阿弥陀仏に遇えたしあわせ」が、二番では「お念仏に生きるよろこび」が讃えられてあり、三番でその「しあわせ」と「よろこび」は、他者と共に受けとめてこそ成り立つことが表現されております。

私は、慶讃法要をお迎えする喜びを、皆さま方と共に受け止めたく思っております。

「真宗再興」。この一句を、われらの「共なる使命」と拝受いたしまして、全力を傾注して、生涯一度限りの「慶讃法要」厳修に、尽くしてまいる覚悟でございます。

議員各位におかれましては、提出全案件について慎重審議の上、全会一致をもってご可決たまわりますようお願い申し上げます。

末尾となりましたが、昨年来、宗議会大聖寺教区選出の但馬弘前宗務総長、参議会小松教区選出の中田郁夫前議長、同北海道教区選出の川原彰議員がご逝去されました。南無阿弥陀仏のもと、教団を尽くされた各位の尊いご生涯に、あらためて敬意を表し、謹んで哀悼の意を表します。

ご清聴、有り難うございました。

以 上